

まんだら通信

平成24年09月号 西暦2012年 佛曆2578年 皇紀2672年

195号

安房国八十八ヶ所 第一番札所

295-0103千葉県南房総市白浜町滝口1084

真言宗智山派 天神山紫雲寺 高橋 龍涉

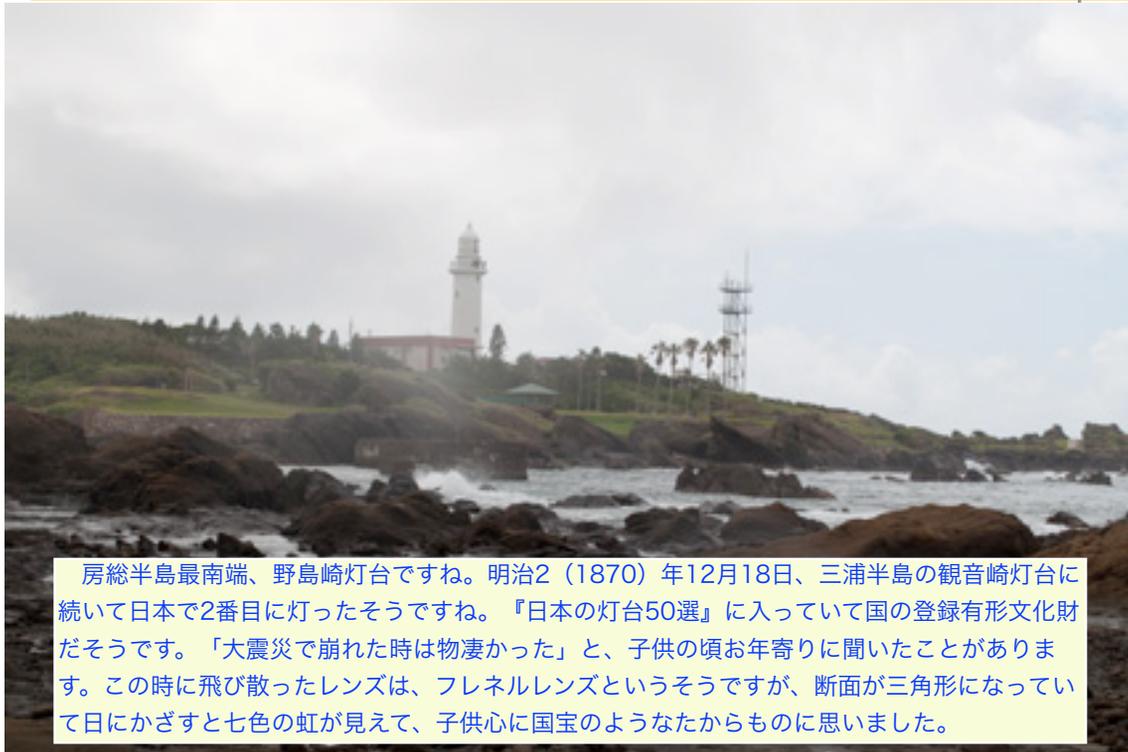
郵便振替 00120-2-43163

TEL 0470-38-4740

FAX0470-30-5040

<http://www.shiunji.org/>

Mail post@shiunji.org



房総半島最南端、野島崎灯台ですね。明治2（1870）年12月18日、三浦半島の観音崎灯台に続いて日本で2番目に灯ったそうですね。『日本の灯台50選』に入っていて国の登録有形文化財だそうです。「大震災で崩れた時は物凄かった」と、子供の頃お年寄りに聞いたことがあります。この時に飛び散ったレンズは、フレネルレンズというそうですが、断面が三角形になっていて日にかざすと七色の虹が見えて、子供心に国宝のようなたからものに思いました。

有難いこっちゃ、結構なこっちゃ

『暑さ寒さも彼岸まで』の9月24日、20人近いお坊様においで戴き、お堂いっぱいのお皆さんとともに、恒例のお施餓鬼が行われました。

今年のご法話は、ご存知の方も多いと思いますが、丸山町東光院の御前さまにお願いしました。

日々の暮らしの中での心配ごとと悩みごとなどに、親切丁寧に関わっておられる間の体験から生まれた、とても分かりやすいお話に、やっぱりお参りしてよかったと思われた方は多いのではないのでしょうか。

私は、そばにいてゆっくりお聴きすることが出来ず、録音してから聞きました。

『お金をかけずに豊かになる方法』など、すぐにも元気が出るお話が沢山あった中から、紙面の都合があるので、一つだけご紹介しましょう。

「Aさんという先輩がいます。成田市の近くのお寺の住職をしています。以前は余り魅力ある人じゃなかった。そう思っていたんですよ。

そのAさんが20年ぶりにひょっこり訪ねてこられました。

まずビックリしたのはですね、見違えるように穏やかで福々しい様子、血色の良いお顔になっていたことです。

そして、お茶を勧めると何やらブツブツ、お菓子をどうぞというと、また口の中でブツブツ言っているんですよ。

私、聞きました。先輩、さっきから何を

ブツブツ言ってるんですか、ってね。そしたらね、あ、これか、これはね、有り難いご真言なんだが、いわれをお聞かせしようかね、とって話してくれました。先輩がお師匠様から任された初めての所は、お檀家五十軒の貧乏なお寺だったそうです。これではとても生活できないと、近くの農協に勤め始めたんだそうです。今は知りませんが、その頃は給料が安くて、余り暮らしの足しにならなかったそうですよ。

縁あって、山梨の大きなお寺の娘さんと結婚したんだそうですが、こんなはずじゃなかった、帰らせてもらいます。という話になってしまうし、そのうち子どもが出来て益々身動きが取れなくなり、昼も夜もいさかいが絶えなかったんだそうです。

そこへAさんの先輩が来まして、あんた達そんなことじゃいけないよ。まして君は衣をまとうお坊さんじゃないか。

私が、幸せになるご真言を教えるから実行することを約束しなさい、とって授かったのが『有難いこっちゃ、結構なこっちゃ』なんだそうですよ。

Aさんはね、有難くもない、結構でもないのにそんなこと言えるか、と初めは思ったそうですよ。

先輩はね、俺も君とおんなじだったから、他人事とも思えない、だから教えるんだよ、と言ったそうです。

奥さんは、当てつけみたいに、いやらしい、って文句を言ったそうです。でもAさんは、生まれつきの頑固さと、先輩との約束もあって、この『有難いこっちゃ、結構なこっちゃ』を続けたそうですね。そ

うして5年過ぎた時、別のもう少し大きなお寺の住職になったそうです。

この辺りから運が開けたというのか、生活が段々と良いほうに向かっていって、今では毎年外国に行けるようになって、もう大抵の国には行ったそうです。

もっとも奥さんは、あんな重いものが飛ぶなんて、私のご免ですって言って、まだ外国に行ったことはないんだそうですがね。

どうですか皆さん。

問題はね、良いと思ったことは続けることが大事なんですねえ。

そうすれば、必ず運が開けます。実行している私が言うのだから間違いのないことなんですよ。」と。

何より、東光院の御前さまは、ご自分の体験をお話しになるので説得力があります。

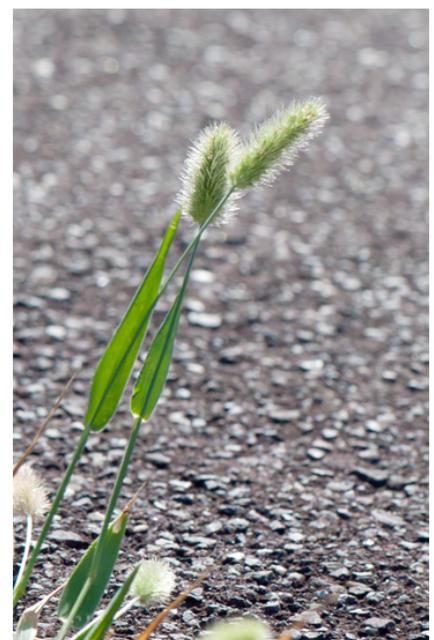
蛇足です。

東光院の御前さまは、当たり前すぎることと思っつけ加えませんでした。自分が幸せになったら、周りのみんなにそれを分けてあげて喜んでもらう、これが本当の幸せなんですねえ。

今回は、10年前のまんだら通信第76号でお伝えしたお話です。当時からですと読者は2倍になりました。お読みにならない人が沢山いらっしゃるし、我が身に当てはまる、とても参考になるお話なので、もう一度掲載いたしました。

ハマエノコロ【イネ科エノコロ属】

道ばたのどこにもあるエノコロ属と違って、全体に小振りで穂も短く、繊細で上品な感じがします。猫じゃらしの仲間ですね。



にっぽん人情小噺

第八十話 天国からの手紙

三遊亭鳳豊

最近、小学校で落語が流行っているんだそうですね。

そんなこともあってか、私たちの仲間が学校に落語を教えに行くことが多いのですが、いまの小学生って、昔とちがって、こちらが一生懸命小噺を教えても笑ってくれないんだそうですよ。

「鳩が何か落としたね」「ふーん」、「この家、雨漏りするね」「やーね」なんて言っただけで笑うどころか、「そんなだったら、いくつだってできるよ」という態度ですからね。

「じゃあ、君、なんか小噺をやってみなさい」って言ったら、先生である噺家に向かって、こんな噺をしたそうです。

「では、お言葉に甘えまして、ひとつ小噺を申し上げます。天国の小噺です。いいですか、世界で一番短い小噺ですから、先生、お聞き逃しのないようにお願いしますよ。はい、いいですか、世界で超短かい小噺、いいですか、天国の小噺。『あのよー』」わかりましたか。

「あのよー」と「あの世」をかけたんですねえ。これには、一本とられましたね。

今日のお話は、その天国から手紙が来たという話です。

九州は宮崎県串間（くしま）市。

ここに天然記念物のサルが棲みついでいることで有名な幸島（こうじま）という島がございます。

この幸島のサルの生態を60年以上観察し続けた女性教師がいました。名前を言えば、ご存知の方もいらっしゃるかもしれませんが。三戸（みと）サツエさんです。

三戸さんは、1914年、広島生まれ。戦前は朝鮮半島や旧満州で日本人の子供の通う小学校の先生をしていたのですが、敗戦によって引き揚げ、以後、宮崎で教師生活の傍ら、近くの幸島のサルの観察を続けたのです。

その活動は高く評価され、特に、サルがイモを洗ってから食べるという発見は日本のみならず、世界でも注目されたのです。

しかし、そんな先生も寄る年波には勝てず、2009年12月、95歳の時、脑梗塞で倒れ、地元の救急病院に運ばれてしまいました。幸い、一命は取りとめたのですが、先生はベッドのなかで、動く右手一本で点滴をすべて引き抜き、口からの摂取も一切拒否し、家族が唇を濡らしても、吐き出そうとする始末でした。

先生は、延命治療を拒み、自然死を希望されたのです。病院側も、患者さんがそこまで抵抗をし続けるのでは対処のしようも

なく、手をこまねいているしかありませんでした。

一週間が過ぎた頃、先生の長女の前田水無子さんは、知り合いの市原美穂さんに電話で事情を話しました。

市原さんは「ホームホスピス宮崎」の代表で、「人生の最期は家で迎えたいけれど、迎えられない」高齢者のために、宮崎市内の四軒の空き家を借りて「かあさんの家」という施設を造り、その日常生活を見守り、最期の時までケアしている女性です。

「飲まず食わずで一週間？。でも、握手したら力があるから大丈夫よ」

水無子さんは、市原さんの意外にも明るい声に励まされ、三戸サツエさんを介護タクシーで「かあさんの家」に運ぶことにしました。そして、その晩から三戸さんは、意識不明かと思われるほど眠り続けました。

その間に、市原さんは医師に頼んで、点滴を頼んだのです。もし、三戸さんが延命を拒むなら、目が覚めてからでも遅くないからです。

三戸さんが目を覚ましたのは、それから三日後のことでした。スタッフが慎重に三戸さんの口に水を入れました。すると、三戸さんは拒みません。眠ったことによって、生きる希望が湧いたのです。それどころか、おなかですいたのか、柔らかく煮た冬瓜（とうがん）をおいしそうに食べました。

「もう、大丈夫よ」。市原さんは、看護疲れで床についていた水無子さんに連絡をとりました。

こうして、元気になって、最後の出版物『サルたちの遺言』を書き上げた三戸さんでしたが、今年4月、98歳の誕生日を前に亡くなりました。その葬儀には、全国各地から多くの方々が弔問に訪れました。百歳近い方の葬儀に、これはどの人が集まるか、と若いマスコミ関係者が驚いたほどでした。

それからしばらくしたお盆の頃、各地で新盆を迎える家が、亡くなった方を迎えるべく準備をはじめた頃、三戸さんがお世話になった「かあさんの家」の市原さん宛に、一通の手紙が届きました。

差出人は、天国にいる三戸サツエさんでした。文面は、こうでした。

いろいろお世話になりました。

病気をしたことのない私は、娘を楽にしてやりたい……と、一時、自分を見失いました。でも、あなたの優しさに救われました。いつも、見守ってくれている安心感で、ゆったりとした気分で、旅立つことができました。おかげで、「人にはどんな死期が待っているのか」、「死を迎えていかに死すべきか」娘に身を以て示せたと思います。そして、私の最期を『サルたちの遺

言』で飾ってくれてありがとう。私の話にいつも耳を傾けてくださってうれしかったです。私の気持ちを天国から届けたくて……。三戸サツエ

もちろん、娘の水無子さんが書いた手紙です。でも、不思議ですね。こうやって、形になると、本当に三戸さんの思いが、天国から届いた気持ちになりませんか。

あなたのところには、どなたから手紙が届いていますか？

余 滴

◆お元気にお過ごしでしょうか。“観測史上初めて”という今年の暑さも、どうにか峠が見えてきたようですね。◆1ページの『有難いこっちゃ…』が載っている第76号を開いてビックリしました。余滴に「ご心配をかけましたが、お陰様で秋になって体重が47キロまで快復しました」とありました。今はぎりぎり40キロですから、この10年で7キロも軽くなっていたのです。

物忘れが酷くなったほかは、身体の方は何ともありませんが。◆お気付きのように今月の『まんだら通信』は体裁が違っています。

分かっているわけではないのですが、コンピュータはそれを動かすエンジンのような、基本のプログラム（オペレーション・ソフト）があって、その上で文章を書いたり、インターネットを見に行ったり、手紙を書いたり、必要なことを探したりする仕掛けがあります。

長い間使っていて手に馴染んだ道具としての、物書きの仕掛けイーザーワードですが、数年前から手に入らなくなっていました。家電製品と違うところは、パソコンの基本ソフトが新しくなると、使っている道具と相性が悪くなることです。

発売中ならメーカーがその都度手直ししてくれるのですが、メーカーがないので不具合は治りません。仕方ないので、この号はアップル社の「ページズ」というソフトで作っていますが、「横文字の国」で作っただけあって、ふりがな（ルビ）や縦書きが出来ないなどの不都合があります。

そもそも、どこにどんな部品が置いてあるのかもさっぱり分かりません。読み難いと思いますがお許し下さいますよう。

◆ネコが今、10匹余り住んでいます。

「ネコには暑い日が3日しかない」というそうですが、この季節、思い思いの場所で一日中ゴロンと寝ています。イヌと正反対で、気に入らなければ返事もしません。そのくせエサをよこせ、ひざを貸せと命令だけはしますが、決して飼い主の言うことは聞きません。

ネコにとって飼い主は主人ではなく、用人なんですね。きれい好きで気位が高いところがネコの可愛さです。そんなネコにほれ込んだ人が発行している『月刊ねこ新聞』をご存知でしょうか。タブロイド判（A3）8ページ、購読料5,280円/年。値段も安くありませんが、よりすぐりの上質紙を使い、誌面が汚れるからと広告を載せず、寄稿する人は出久根達郎、高村薫、竹下景子、水谷八重子、森永卓郎、内館牧子など、当代を代表する錚々たる人たち。ねこの挿し絵は小澤良吉と、これ以上ないという贅沢な、これぞ文化国家日本という月刊紙です。◆ご案内を差し上げた方も多いと思いますが、今月24日午後1時半からお施餓鬼です。いつものように、丸山・東光院の近藤僧

